

～輝きの子育て～

「将棋」と「囲碁」子どもにはどっち？

久しぶりに週刊誌（週刊新潮3月1日号）を読んでいたら、「将棋」と「囲碁」子どもにやらせるならどっち？という、なかなか面白い記事を見つけました。既読の方もいらっしゃると思いますが、その内容を紹介します。

羽生善治、井山裕太両氏は国民栄誉賞。将棋では藤井六段（中学3年）は29連勝記録と本年2月には羽生を破っての朝日杯オープン戦優勝、一方、囲碁の井山七冠も2月棋聖戦で6連勝を飾っている。

若きスターが思う存分躍動しているのが、今の囲碁、将棋の世界である。

脳科学者の茂木健一郎氏によると「藤井は左脳だけでなく右脳も優れている。次の一手を考えるための「持ち時間」が4～9時間などのタイトル戦に比べ、朝日杯は40分。考える時間が短い「早指し戦」である。この場合、思い浮かんだ手の精度を検証する時間が少ないので、より直観力が試されることになる。

直観とは、瞬間的にパターン分析を行うことだから右脳の働きが中心になる。対して、持ち時間の長い棋戦では、左脳による論理力や推理力が問われることになる。」

「逆に言うと将棋をやることによって、直観力と論理力が鍛えられる訳だ。「早指し」は短い時間内に正答しなければいけないセンター試験など制限時間の短い試験に力を発揮するのに役立つ。

一方、長考の将棋に強くなることは、東大の二次試験など、じっくり考える必要のある課題への対応能力をアップさせることに繋がる。」

早指しや長考は囲碁にもあてはまる。

将棋や囲碁は集中力を鍛えることに結びつき、学習にも応用が利く効果がある。

「どちらを習わせるかは、その子の特性に合わせ親が見極めるべきで、欠点を補おうとするのではなく、良いところを伸ばそうと考えることが大切で、チャンスを与えるのは親の役目だ」と神経内科が専門の米山医院院長の米山公啓氏は言う。

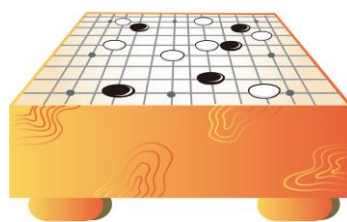
将棋は王を取るため理詰めで手順を考える。論理的思考の能力を伸ばすのによい。一方、囲碁はより広い盤面で自由に打ち合うので、新たな発想を見出す喜びを味わえる。芸術などの創造力を喚起する脳の機能が大いに刺激される。美的感覚の鋭い人は囲碁のセンスがあるといわれている。

先の茂木氏は次のように言う。「理詰めの将棋か、美的感覚を養う囲碁かは、気質も判断材料になる。」
「将棋は王が取られたら終わり。勝負がハッキリしているので、負けず嫌いな子に向いている。勝つことが嬉しくて伸びるタイプは将棋にむいている。囲碁は自陣を広げるため一進一退を繰り返す、ある場面では負けても次の局面では勝つ。全体を見渡す空間認識力を使うため、大局観やバランス感覚が養われます。」

「経営者は常に先々を見通す大局観やバランス能力を求められるから囲碁を好む傾向がある。」

どんな子どもに育てたいのか、まずオトナが「長考」してみても・・・と週刊新潮は締めくくっています。

以上



片野 英司